于丹《論語》扶桑(注:日本のこと)に行く。

于丹教授が来た！

“道は人に遠からず”。これは《中庸》に記載された孔子の言葉である。意味は“本当の道は自分の近くにあり、普通の生活の中にこそ真実がある”というものである。

聞くところによると、于丹教授は2006年10月、中国中央電視台の人気番組《百家耕壇》の中で《論語》の講演をし、大変な人気を博したとのこと。中国の人口の半数にあたる7億人がこの講演を聞き、この講演は《于丹〈論語〉心得》として出版された。このようなことから、未曾有の“于丹現象”が巻き起こった。口火を切るに至った文章は《論語力》に収められ、序文として発表されている。

2008年1月26日9時5分、于丹教授は羽田空港から飛び立つ全日空873便の最前列のスーパーシートに座っていた。チェックインの時、私は一枚のスーパーシートの搭乗券を孔健氏に手渡した。しかし、孔健氏はその航空券を于丹教授に手渡した。「あなたはどうして座らないのですか？」私の問いに孔健氏は「先生はとてもお疲れです。」そう言って私と同じエコノミーに座った。その姿に私は非常に感動した。于丹教授とは英語で話し、孔健氏とは日本語で話した。于丹教授の秘書祝氏とは英語に加え、中国語で会話をした。とても奇妙な三ヶ国語による交流の始まりである。風と雪の影響で、羽田空港を出発した時点ですでに30分の遅れが出ていたが、滑走路の除雪に時間を要し、秋田空港に到着した時には1時間の遅れになっていた。孔健氏が荷物が出てくるのを待っている間、私は于丹教授に付き添い飛行場の外を見ていた。まだ飛行機の中にいた時、于丹教授はずっと「わっ、わっ、」と驚きの声をあげていた。私はいったいどうしたんだろうと思っていたが、その頃私はまだ于丹教授の全てを理解していなかったのだ。教授がリムジンバス乗り場に戻って来た時、雪を見て数個の雪球を作り、並べ置いてそこに座り喜んでいる様は、可愛い子猫がこたつの上でまりと戯れているようで、一言でいうならば“天真爛漫”であった。

会社に取り寄せておいた「論語」を取りに行くためまず秋田方向に向かうことにしたが、その途中、カメラのシャッター音は腕時計の針のように絶えることなく「カシャッ、カシャッ」と鳴っていた。于丹教授はずっと「とても綺麗。本当に美しい。」と言っていた。

教授は何度もこう言った「北京は非常に寒く乾燥している。まるで砂漠のようだ。」「秋田は純白で美しく温暖な地域だ。」大曲に到着し、バスから降りた時、教授はまた雪の方に走ってゆき、真っ白な雪をすくい上げていた。

視野を広げる

大曲で“ロータリークラブ”の有志が参加して初の「秋田論語教室」が開かれたがその席上、瞬く間に参加者は視野を広められることになった。于丹教授の講義は一時間半に及んだが、黒板の上を白墨が走り回り、それはまるで書道の授業のようだった。若く美しい北京師範大学の教授は天から舞い降りた天女のように特別講義を進行したが、それは極めて普通の学習風景のようでもあった。黒板の字が消されるたびに「ああ、もったいない。紙に書かれていれば…」と皆が思った。しかしそれは後の祭りであった。

今回の講義はほぼ一時間遅れて午後1時に始まり、またたく間に終わった。大曲PC創立50周年記念活動委員会堀江先生は姉から引き継いだ一冊の「論語」を持参した。これは昭和8年(1932年)、岩波書店から発刊されたものである。翻訳は竹内義雄、定価は当時40円。昔、秦の始皇帝の時代に“焚書坑儒”があったが、孔子はたびたび権力の迫害を受け、そのためこのような古いものが残っているのは珍しい。そして兄妹の間で継承されているのは非常に貴重なことだ。このことは孔健氏と于丹教授を大いに驚かせた。かつて中国でもこのような背景を通じて《論語》は“于丹”という一人の女性に伝播し、2,600年を経て再び中国大陸に《復活》したのだ。

極めて優れた授業

いつの間にか、〈秋田論語教室〉は2時間を経過し、間もなく終わろうとしていた。しかし7名の学生が〈論語〉は現在中国でどんな状況に置かれているのか？今でも応用されているのか？子供と老人はどのように論語に関わっているのか？等の質問をした。于丹教授はわかりやすい言葉で奥深い内容を説明した。“仁”“愛”“泰”“寛”“信”“敏”“知”“勇”という論語で語られている問題は世界的な問題であること、例えば“人類と自然の関係は一体である”。“素晴らしい大自然が良い人を生む”。“自分が関わっていないことを他人にさせてはいけない。これは‘仁’の根本であり、‘愛’の根源でもある”等。

人類の生活や生活の状況は2,600年前から今に至るまで、根本的には何の変化もない。人類の生活の普遍性はすでに認識されている。無論誰でもが“確かにそうである”“知っている”と認めることができるであろうが、于丹教授の口から出てくる“道理”は彼女が《論語》の伝道者であると皆が本当に認識できるものである。

于丹教授の講義は決して華麗な言葉で語られるものではない。自分の考え方で、自分の心で“道理”を作り上げてゆく。それはまるで朝もやの水分が木の葉の上に水滴を落とすかのようであり、それが地面に落ちて静かに吸収されてゆくかのように、ぽたぽたと…人の心の中に爽やかにしみわたる。私は、これこそが人の心に伝わる“道理”であり、これこそ《論語》の真髄であると思った。

7名の学生も于丹教授の講義に瞠目し、十分に満足したようであった。この時、別れの時間がやってきた。誰からともなく拍手を始め、于丹教授の微笑みの中9月28日の再会を約束して秋田論語教室は幕を閉じた。

于丹教授の話は孔健氏によって通訳され、正確に伝えられた。その言葉の深い部分には更に深い意味が含まれているにしても、それは我々の生活に直接影響するだけの能力を秘めている。お別れに際して参加者の“ありがとう”の声が途切れることはなかった。

私達は神秘の湖、田沢湖(水深423メートル)に車で向かい、次に“鶴の湯”に立ち寄ることにした。まず国道105の間倉、松倉、小杉山の後ろ側を通り、杉沢のリンゴ園に到着した。無人販売所で“富士”を買い求めかじり始めた。道中、景色のよいルートを選びながら走ったが、角館、西木

を経由して辰子姫の像を通った。この間中、カメラのシャッター音は洪水のように止まることはなかった。

自由に歩く秋田の魅力

秋田は非常に美しいところである。多くの秋田人が忘れてしまったか、或いは注意をしていない多くの魅力がある。初めて秋田を訪問する3名の外国人を通して、私達は直接秋田に対する賛美の言葉を聞いた。これほど嬉しいことがあろうか？

私が秋田から海外に出張し、戻ってくるたびに秋田に戻った嬉しさを感じ、とても幸せな気分になる。今回、于丹教授一行が秋田にやってきたが、私は同種の幸せを再び感じることができた。そしてこんなにも多くの感謝を得られるとは！車の中には出版社の社長がいた。彼は食品輸入のためロンドンから秋田に来たのだが、彼もまた感嘆の声を上げていた。「秋田は本当に良いところで、何度来ても飽きることがない。」彼のこの言葉を聞いて、更に我が故郷の美しさを認識した。そして昨年 10 月、ドバイから秋田にやってきたABBASのことを思い出し身をもって秋田の魅力を感じていた。

田沢湖では、たくさんの雪の中に身を投げて思い切り遊び戯れたり、雪を背景にニコニコ笑ったり、雪球を握って投げたり、雪の中で子犬のように遊びまわった。

例えば《論語》の心はこのような単純な生活の中にも現れるのだろうか？この問題はこういった場面においても絶えず私の頭の中に思い浮かぶのであった。この時、田沢湖にあらかじめ予定されていたかのような出来事が起こった。たくさん降っていた雪が止み、いまにも沈もうとする夕陽が湖面を照らし、湖面を薄い霧が覆い始めたのだ。こんな神秘的なことがあろうか？私は彼らに思わずこう告げていた。「我々は辰子姫を拝み、白い雪をつかみ、神秘的な太陽の光や霧を拝みましたが、これはすべて于丹教授と孔健氏のために準備しておいたのです。」私の考えを伝えるや、于丹教授と孔健氏は"謝謝！謝謝！"と感謝の声と秋田の旅に対する満足の意を何度も伝えていた。

田沢湖の西側を走り、御座石神社の赤い鳥居の近くに1メートル近い積雪があり、我々は革靴を履いたままためらわずにそこに入っていった。"日東第一渓"の石碑と古い杉の木をバックにシャッター音は止まず、1ギガの容量は使い果たされていた。

友遠方より来たる

宿泊所に向かう下り坂の途中、後部座席では絶え間ない疑問の声が聞こえた。"こんな真っ白な道路をどうやって走るのか？ひょっとして道路ではないのではないか？"そんな声を聞きながら私は雪国に住んでいることを誇らしく思いながら、車のライトをつけ走り続けた。

私はロータリークラブの会員である鶴の湯温泉の佐藤社長に事前に宿泊の依頼をしておいた。佐藤社長は異国の風情を味わってもらおうと、かやぶき屋根の家、いろりとランプを準備してくれた。お客様は大喜びで火鉢を囲み、炭火に手を伸ばしたり不思議そうな表情を浮かべたりしていた。

皆お腹が減っており、火鉢に身を寄せたあと荷をほどき、露天風呂に向かって歩を進めた。灯りはすべてかすかなランプの灯りである。男湯に入ってから長い時間誰も現れず、心配していたところ、"カタカタ"という音が聞こえたものの人影はなく、私は祝さん一人を残して出て行ったところ于丹教授がやってきた。于丹教授によると、彼女が遅れてやってきた理由は近くにある内湯で滑ってしまい、その勢いで湯の中に頭まで沈んでしまったのとこと。思いがけぬ出来事であったがその他のトラブルはなかったと知って私は安心した。その後、みんなで記念写真を撮り、食堂へ向かった。そこは"鶴の間"という名前だった。いろりには人数分のサケ（訳者注：原文の"大馬哈魚"をそのまま訳すと"サケ"になる）の串焼きが円形に刺されていた。新鮮な魚のにおいをかぎながら、私達はおいしく食べたのだった。

田沢湖のロータリークラブから7名がやってきた。有森さん、長谷川さん、三浦家の5兄弟である。それから大曲PCの参加者であり会員の池田君、秋田大学教授吉崎御夫妻、ロンドンからやってきた丸茂社長、我々一同 12 名による交流会が始まった。

鶴の湯佐藤社長は"秘湯のビール"と、"秀よし"の数量限定の酒を持ってきた。私は黒田節と社邦傑の演目を疲労した。私が海外の宴会でいつも披露するものである。

社邦節に皆手拍子を打ち、私は即興でその場にいた人たちの名前を織り込んで 18 番まで歌った。私の芸は秋田人をさえ驚かせ、予想以上の効果を生み出した。

孔健氏と于丹教授はこう言った"素晴らしい。この歌詞は《論語》に置き換えてもおかしくない"彼らが歌った 2 番目の歌詞は"友遠方より来たる"と"温故知新"であった。彼らはこれは中国でも必ず流行するだろうと高く評価した。酒が入るにつれて声も大きくなり、2階からうるさいと抗議が来たので楽しみも尽きない宴会も終えることにした。

記念写真を撮った後、再度温泉に入り、その後"二次会"が始まり、深夜 2 時まで続いた。"遠方の客"は一次会のあとで就寝したので心配には及ばないが、羽田空港から始まった長い長い一日はこうして無事終了したのだった。

次の行程

二日目（27 日）は晴天だった。車は 20 センチの積雪に埋まっていた。朝食の後、三々五々温泉に入ったり散歩をしたりした。10 時には解散し、下山して再び田沢湖に向かった。湖の東側の潟分校である。ここを《秋田論語学校》にするという構想がある。それで今回の旅行の計画に入れたのである。ちょうど分校後援会会議が召集されていたが終了する時刻だったので、我々は教室の中に入ってみた。古い教科書や教育勅語を見て皆感慨にふけっていた。

ここには 2 冊のボロボロになった"修身書"があった。これは《論語》と言ってもいいものである。会長の許可を得て、私は 3 名の来賓を紹介した。その後皆で記念写真を撮り、再会の約束をして潟分校を離れた。

角館青柳家では、昼食が名物の麺だった。その後唐松神社に物部氏を訪ねた。物部氏は第 64 代目の当主であり、最高神官物部長仁氏が神社の成立について解説してくれた。長仁氏の名前

は言うまでもなく論語から来ている。物部氏の家族の名前はすべて論語に基づいているのだ。長仁神官のお茶の接待を受け、神社を案内してもらい、2 時間に及ぶ滞在を終えて唐松神社を後にした。

空港に向かう途中、ついでに"宿の地清水(店名)"で秋田の名水を味わった。3名の客人はその後沖縄へ向かった。沖縄では私の息子と友人が待っていた。夜10時過ぎに無事那覇空港に到着したとの知らせを聞いた時、私はやっと安心することができた。

今回は短い滞在であったが、充実した日程と接待ができたことは皆様方のご協力のおかげである。ここに友人の皆様とロータリークラブの皆様に衷心から感謝を申し上げる。